

## 第5回(2008.12.22 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「12月は除夜の鐘」

年の暮れには新年に向けてたくさんの行事があるが、新年に向けての行事の一つに、「門松飾り」や「注連縄」を飾り、床の間には「鏡餅」を供えるが、これらは一般的に12月28日に行われてきた。また、大晦日には各地の寺で除夜の鐘を鳴らして新年を迎えるのが日本の伝統文化である。門松は、年神(歳神)を迎え入れるための依代(よりしろ、神や靈魂が寄り付くもの)である。年神の年とは、本来は稲の実りのことであり、すなわち食糧の神のことである。

食糧神は、日本神話では保食神(ウケモチノカミ)または宇迦之御魂神(ウカノミタマノカミ)あるいは大宜都比売命(オオゲツヒメノミコト)などといわれる神である。

『古事記』によれば、建速須佐之男命(タケハヤスサノオノミコト、素戔鳴尊)が大宜都比売命を切り殺してしまい、その死体の頭が蚕、目から稲、耳から粟、鼻から小豆、尻から大豆、陰部から麦などが出たという。

神話には多くの陰部にまつわる話が出てくる。「なるほど、神さまもお好きなことで」などとニヤニヤしてはいけない。それは古代人が陰部から出産することで種族繁栄、五穀豊穰を願い崇め奉っていたからであって、世の男性諸君のように だったからではない。

『日本書紀』によれば、月読命(ツクヨミノミコト)が葦原の中国(あしはらのなかつくに=地上界)に降り立つと、保食神が月読命をもてなすために、口からいろいろな食べものを出したので、「きたない!」とって殺してしまった。その死体は稲、粟、稗、麦、豆、牛、馬、蚕などになった。これが穀物の種子の始まりになったとあり、『古事記』と似たような話になっている。

また、注連縄は神の領域をあらわす「結界」を意味している。同時に悪霊が入り込まないためのまじないでもある。

鏡餅は単なる食糧ではなく、神に捧げる供物であり、神からの下され物として食していた神聖な食べ物だったから、餅を「年玉」ともいって、新年の歳神からの下賜されるもので、「年の魂」の意から来ているというが、そこから雑煮などへは古くより丸い餅が入れられた。

鏡餅の名前は、神社の神鏡が円形であるところからきており、神前に供えた鏡餅は、1月20日に汁粉や雑煮にして、一家の円満な平安を願って食べた行事が武家社会で行われたのが始まりだが、3代将軍の徳川家光が1月20日に亡くなってからは1月11日になった。

この行事を鏡開きというが、大きな餅を刃物で切るのは切腹を連想させ、武家社会で嫌われたため、手で割ったり木槌で砕いたりすることから、鏡開きとか鏡割りともいわれた。したがって、鏡餅以外であっても餅は本来円形だったが、武士が登場して戦場での携行食糧となってから、四角い餅が食されるようになる。平安時代に登場した武士の活躍が華々しかった関東以北においては四角、関西以西では丸餅が食されている。

もっとも、現在は嫁さんが強いから、関西人の女性と結婚したら東北でも丸餅になるだろうし、関東人女性が関西に嫁ぐと四角い餅が食されるだろうから、早晚このような違いはなくなっていくだろう。

このような年末の飾りについては「一夜飾りはいけない」と言われており、28日までには飾られるのが良いとされている。29日でなぜ悪いと言う人もいるだろうが、旧暦では12月は30日まででなかったため、大晦日(おおみそか)は31日ではなく30日だった。

大晦日は大変忙しいので、遅くとも28日には正月の飾り付けを終えてしまいたい、ということだっ

たのだろう。その習慣が現在に続いているため、「一夜飾りはいけない」と言うことと、「28 日まで」と言うこととがそれぞれ独立して伝えられてきたためであろう。

飾りつけて、朝早くから店を開けて、夜になると大提灯に灯をともし、煌々とした明かりの下に、除夜の鐘が鳴るまで商売に追われた。

大晦日は、おおつもごり、大年(おおとし)あるいは除日(じょじつ)などとも呼んだので、大晦日の夜を除夜というのだが、除日とは、一年の暦を取り除く日からきた言葉だ、という説がある。

この除夜には、年越し蕎麦といって、蕎麦を食べる風習がある。その理由は、縁起担ぎなのだが、蕎麦のように細く長く生きられるように、ということから来ているという説や、その昔、金や銀の粉をそば粉を使って集めたことから、お金が集まるように願ったという説など、いろいろな説がある。蕎麦よりはラーメンが好きだという人は、蕎麦のような縁起担ぎの理屈を考えだして世に広めるのも一興だが、「信州信濃の蕎麦よりもわたしゃあなたのそばがいい」といって、コタツに入ってイチャイチャしたい、などとバカなことをいう者には、裸にひんむいて戸外に出し頭から水をぶっかけてやろう。

除夜から午前 0 時をはさんで、あちらこちらのお寺から「除夜の鐘」の音が聞こえてくる。戦時中は大砲の弾丸などを造るために、お寺の鐘が軍に供出されて、終戦当時は除夜の鐘の音が聞こえなかった時期があった。

お寺の鐘すなわち梵鐘のなかでも京都妙心寺の梵鐘は、その銘から 698 年に製造されたもので、製作年代が明らかなものとしては日本最古の梵鐘として国宝に指定されている。

また、梵鐘にまつわる有名な話では「方広寺鐘銘事件」がある。豊臣秀吉の死後、豊臣秀頼は方広寺を再建して大仏開眼供養を行おうとしたが、徳川家康の側近である怪僧金地院崇伝(こんちいんすうでん)は梵鐘の銘に「国家安康」、「君臣豊楽」の文字が刻まれていることに目をつけて、「国家安康」は家康の名前を引き裂いており、「君臣豊楽」は徳川が滅び豊臣家が栄えるとの呪いが込められているとあって、徳川家康が豊臣家を攻めるための口実をつくった。

能で有名な「道成寺」のもととなった「安珍・清姫」伝説は、安珍が清姫から逃げてきた紀州道成寺の和尚が、梵鐘の中に安置をかくまったが、清姫は蛇と化し、鐘の周りに巻きついて中の安珍を焼き殺してしまうという物語である。

除夜の鐘は 108 回撞くというが、人間の煩悩の数が 108 であることから来ている、というのが定説である。これによると、人間の感覚を司る眼、耳、鼻、舌、身、意の六つを六根というが、それぞれに好(すき)、悪(きらい)、平(何も感じない)の三つがあり、これを掛けて  $3 \times 6 = 18$  の煩悩になる。また、この 18 の煩悩には浄(きれい)、染(きたない)の 2 種類あるから  $18 \times 2 = 36$  になる。さらに現在、過去、未来の三つの時間が関わるので、 $36 \times 3 = 108$  となる計算である。また、108 は煩悩の数ではなく、12 ヶ月と二十四節気と七十二候を足して 108 になるからだ、という説もある。

いずれにしても、新年を迎え、煩悩や邪気を祓う神聖なものだから、勝手に鐘を撞いてはいけないのは当然だが、最近では庶民に除夜の鐘を撞かしてくれるお寺が増えてきた。

煩悩を祓いたい、という願いを込めて鐘を撞くのだろうが、そのこと自体がすでに煩悩なのだから意味がない、とか、鐘を撞くのもお賽銭を弾まなくては御利益がないなどといって、いつもより大目にお賽銭をあげてしまうだろうから、お坊さんはいい商売だなあ、などと思ってしまうあなたは、罪深い人間だ。新年早々、反省しなければいけない。